

二〇二三年度

一般入試② 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

亮二は若い頃から漫画家として認められてきたが、だんだんと人気がなくなり、少年誌でのヒーローものの連載漫画も打ち切りとなってしまった。漫画家としての行きつまりを感じながらも、青年誌で料亭を舞台にした漫画の作画を担当してきたが、長崎の実家で兄が倒れたことをきっかけに、漫画家をやめて家業を継ぐことを決意する。東京の空港で長崎行き飛行機を待っている時、旅行者の似顔絵を描いている老紳士に出会い、そこで似顔絵を描いてもらいながら、自分の身の上話を語っている。

実は亮二の漫画を知っているのだと老紳士はいった。

最後に打ち切りになった、少年漫画誌での連載漫画のことのようだった。

静かな笑みを浮かべ、画材を片付けながら、老紳士はいった。

「描線が美しく繊細で、けれど元氣と勢いがある、いい絵だと思いました。ストーリーもやや古風でシンプルではありませんでしたが、少年漫画の王道という感じで、わたしは好きでしたよ。何より、人間や世界への愛に満ちているところが、良いと思った。正直、なんでこれが終わらなくてはいけないんだろうと首をかしげました。あんまり心残りだったので、筆名を覚えてたんです」

ほんとうに惜しかった、と老紳士は繰り返し、そしてこの思いを直接告げられて良かった、と、微笑んだ。

「ああ、ありがとうございます」

色紙の代金を支払い、椅子から立ち上がりながら、亮二もまた、微笑みを浮かべた。

嬉しかった。心から。

「そうやっていただけると、打ち切りになったあの漫画も、成仏できそうな気がします。漫画、好きなんですね」

老紳士は軽く肩をすくめた。

「昔、描いてましたから」

「え？」

「たぶん、名前を聞けば、あなたの記憶の片隅にあるような、そんな遠い昔の、そこそこメジャーな描き手でしたよ。漫画一筋、長く長く描いてきました。ひととしての暮らしは何かも捨てて、漫画を描くために生きているような日々でした。漫画というものが大好きだったから、それでもいいと思っていた。——ただ、贅沢な話なんです、あまりに売れっ子過ぎたね。抱えた仕事がたくさん過ぎて、手に負えなくなっちゃって。自分が本当にこの仕事を好きなのかどうかかわからなくなって。ある日、失踪したんです。仕事を全部放り出して」

「……」

「過去も名前も捨てて、それから各所を流れ流れました。縁やらつてやら巡り合わせとかがありまして、気がつくとき、ここで似顔絵を描くようになりまして。

そしたら——」

ふうつと老紳士はため息をつき、笑った。「楽しかったんです。ああこれが自分の天職だったのか、と思いました。毎日毎日笑顔を見つめて、笑顔を写し取り、描き残してゆく。笑顔でお礼をいわれ、笑顔を描いて得たお金に感謝し、笑顔に囲まれて暮らしてゆける。人生の旅の果て、なんて幸せな日々を得たのだらうと思いました」

なるほど、と亮二はうなずいた。

「わかるような気がします。——俺も、故郷に帰ったら、似顔絵に挑戦してみようかな」

半ば思いつき、半ば本気でそう口にしたとき、

「あなたは、似顔絵じゃなく、漫画を描けばいいのですのに」

静かな、けれど強い声で老紳士がいった。

「え、でも、俺はもう田舎に帰るんですし……」

「ご自分でさつきおっしゃってたじゃないですか。いまはどこにいても漫画が描ける、都会から遠くにいても、出版社とやりとりはできるし描き続けられるって担当さんに説得されたって。そして、担当さんたちはあなたの復帰を待っていてくれるって。おうちのお手伝いをしながら、自分のペースで少しずつ描くこともできるんじゃないですか？」

「それは——そうなんです、でも……」

3 亮二は口ごもった。「俺は、そこまであの料亭の漫画が好きかどうか分からないですし、俺が本当に描きたい、ヒーローが活躍かつやくするような少年漫画は、人気が出なくて描けないですし。いや、自分ではそこそこ面白いと思ってましたよ。自分の漫画、大好きでしたよ。でも、運も才能も、あと一歩、たりてなかったっていうか……夢を見続けるのは、無理だったというか……」

「夢、諦めあきらなさやいけないですかね？」

老紳士はいまは目を上げ、ひた、と亮二を見据みまえるようにしていた。「夢の卵を抱えて、いつか瞬かえる日待つ人生というのも良いかと思えますよ。夢見ることを諦めるのは、いつでもできますのでね」

亮二は返答に迷い、茶化4するように笑った。

「いやでも、俺の漫画家としての人生は、失敗に終わったと、その、思ってます」

5 「人生に失敗とかバッドエンドとかってあるんですかねえ。生きている内は続いている連載漫画みたいなものなんじゃないかと思うんですが。そう勝手に打ち切らなくても」

老紳士は楽しげに笑う。笑っていない目で。「人生という漫画の読み手は自分。描くのも自分。読者の気が済むまでは夢の卵を抱えていてもいいんじゃないですか？」

「……」

6 「ああ、いやすまない、すみませんでした」

ふと我に返ったように老紳士は笑い、手を打つと、柔和な表情で亮二に頭を下げた。

「ついでね。もつたいたいと思ってしまつて。いやね、業界に長かつたでしょう？ 運やツキに恵めぐまれなくて、消えていった漫画家をたくさん見てきたんですよ。すごくいいものを描いてた奴やつもたくさんいた。でもみんななくなっちゃつてね。いや、消えた漫画家といえば、自分自身がまさにそのひとりなんですが、ははは。——あのね、覚えていて欲しいんです。人間どんなに実力があつても、良い風に恵まれなくて、にっちもさっちもいなくなるときがある。そんなときは風を待っていてもいいんですよ、きつと。静かに、諦めずに。良い風が吹くその日まで」

「風を、待つ——？」

「はい」

老紳士は微笑んだ。どこか仙人せんじんのような、予言者のような、そんなまなざしをした。

そして、ふつと笑つて付け加えた。

「すみませんね。あなたの漫画があまりに良かったものだから、つい夢をみてしまったのかも知れません。自分が行かなかつた道のその先を目指してもらえるかも知れないと。もっと遠くまで、あなたなら行けるかも知れないと。——そうしたら、わたしの心の片隅にまだ生きていた、漫画が好きだという思いが報むかわれて、成仏してくれそうな気がしたのかも」

亮二は老紳士にお礼をいって、ふらふらと歩き出した。飛行機の搭乗時間とうじょうがどうなったのか、もう諦めて明日の便にも変えてもらった方がいいのでは、と脳の片隅の冷静な部分が気にしていたけれど、それよりも老紳士から聞いた言葉が、じんと沁しみていた。

（そうか、諦めなくてもいいのか）

（夢の卵を抱えていても、いいのか）

（風を待つ——）

空港のあちこちに飾かざられた桜の花の造花が、美しく見えた。

花たちに招かれるように、ゆらゆらと、上りのエスカレーターに乗り、手すりに寄りかかるようにして、上を、空の方を指していた。

夜が近づいた空が、大きなガラス越しに見えてきた。紫色の宝石のような光をたたえた空が、滑走路かつそうろを滑る飛行機が見えた。

いくつもの翼つばさが、空を目指し、陸へと降りてきていた。翼に灯あかりを灯して。

「そっか、何度飛び立ってもいいんだな」

一度地上に降りても、また空を目指してもいいのだ。何度だつて。生きている限り。

7 空は永遠に続き、旅立つひとびとを待っていてくれる。空から舞い降りる翼を、空港は待っていてくれるのだ。

(到着地の天候不良のため、長崎便は最終便を除いて全て欠航となっていた。亮二は翌朝の第一便で帰ることにし、家族へのお土産をあれこれと選んだ。)

よし、完璧だ、とまた歩き出した第一ターミナルで、小さな書店が目に入った。

少しだけ心が切なく痛み、同時に、いやいや自分は諦めないことにしたんだ、と首を横に振る。顔を上げ、歩み寄る。エプロン姿の若い書店員の女性が、ワゴンに本を積み上げていた。入り口の前の、本がめだつ、とてもいい場所にワゴン置いて、亮二が作画している、あの料亭の漫画の単行本を全巻揃えて積み上げている。そしてそのそばに、愛らしい手書きのPOPがまさに飾られようとしているところだったのだ。

「惜しまれて間もなく完結」

『世紀の名作を読んでみませんか』

『感動の人間ドラマと飯テロの嵐』

ありがたくて、胸が熱くなった。

少年漫画誌で連載をしなくなって以来、辛くて書店からも足が遠ざかっていたので——料亭の漫画が安定した人気があると知ってはいても、こんな風に大切に売られているところを見る機会はなかった。

もしかしたら自分の知らない場所で、こんなふうに平積みになれ、POPを飾られて売られていた本たちがたくさんあったのか、と思うと、嬉しいよりも申し訳ない気がした。

「あの——」

亮二はつい、その書店員に声をかけていた。深く頭を下げ、お礼をいった。

「その漫画の作画を担当している者です。ありがとうございます」

きよんとしている彼女に、この住所からはもう引越すのですが、と断りつつ、名刺を差し出す。POPの写真を撮って担当編集者に送ろうと考えていると、書店員は、名刺を穴が開くほど眺め、握りしめると、この書店のコミック担当の者

です、と自分の名刺を震える手で差し出した。亮二に会えたことが嬉しい、夢のようだ、と頬を染め、早口でいった。

「あの、もともとわたし、食いしん坊なので、料亭まつもと屋さんの料理の数々にうっとりしましたし、ライバル店の料理や料理コンテストに出てくるメニューにもよだれがたれそうでした。あと、まかない飯がまた。レシピが載って作れるようになってるじゃないですか？ みんな作りました。美味しかった」

両手を握りしめ、さらさらしたまなざしをして、深くうなづく。漫画から出てきたみたいな感情表現をする女の子だな、と微笑ましかった。

「それと、わたし、接客業なので、料亭まつもと屋さんのみなさんが、お客様のことを思う姿や、いろんなエピソードが好きでした。ここは空港の中の小さな本屋で、高級料亭じゃないですけど、こんな気持ちでお客様をお迎えしたいなって、いつも思っていました」

そして彼女は、深く息をして、うつむいた。

「——あの、でも、もうすぐ連載終了なんですすよね。打ち切りじゃないって版元さんにはうかがいましたけど。なんでまた。——わたしたちの応援がたりませんかでしたか？」

悲しげに目が潤む。

「あ、いや、そんなことは。——ええと、俺の、家庭の事情です。ちょっと故郷に帰らなくちゃいけなくなって。ごめんなさい」

「じゃあ、漫画が嫌になったとか、この作品が嫌いになったとか、そういうのじゃないんですか？」

「それはないです。断じてないです」

きつぱりと、いいきつぱり。

すると彼女は花が咲いたような笑顔になり、明るい声でいった。

「じゃあ待ってます。いつか、このお話の続きが読める日が来ることを。先生の新作とまた巡り合える日が来ることを。」

II 大丈夫、この作品が始まる日まで待ったんですから。先生、ちゃんと帰ってきてくれた」

「?。」

「十代の頃、先生が少年誌に描いてらっしゃった漫画の大ファンでした。単行本はいまも本棚に並べてますし、単行本に入らなかった読み切りは雑誌から切り取って持ってます」

宝物です、と彼女は笑った。

「連載の最終回に、雑誌の巻末の先生からの一言のコーナーに、『また帰ってくるぜ』って書いてあったから、ずっと待ってたんですよ。料亭の漫画で再会できて嬉しかった。わたしもうおとなになってたし、本屋さんで働いてますから、よし応援するぞ、って思いました。——料亭のみんなは、先生の昔の漫画みたいに、変身したりどこかの王国の騎士さまだったり、超能力で悪と戦ったりしないけど、でも、優しくてかっこよくて、いろんなことに挑戦して、いろんなものと戦って。新しい号を読むたびに癒やされ、励まされてました。世界のどこかに、夢を持ち、誰かを愛し、懸命に仕事をしているヒーローが、仲間たちがいるような気がして」

巨大な空港の、広く大きな窓ガラス越しの空は夜になっていた。きっと星たちは輝いているのだろうけれど、明るいここからは見えない。けれどその代わりのように、照明がガラスを輝かせ、行き交う旅人たちの姿を映し出していた。窓の外には、星空へと飛び立つ飛行機の姿がある。飛び立つ時を待って、並んでいる翼たちの姿も。

亮二は輸入ワインの店で飲み物を楽しみ、作りたてのサンドイッチにたまに手を伸ばしながら、いま見た書店のことを担当編集者にメールした。売り場の写真の添付も忘れない。

送信ボタンを押してから、ふと顔を上げた。

「ヒーローか、そうか……」

自分にも、ヒーローの物語が描けたんだな、と思った。もちろん、優れた原作あったことだけれど、日々大切なものを守り、戦うひとびとの物語を描けていたんだな、と思った。

気づいていなかったけれど、それって、¹² なかなかっこいい仕事だったんじゃないか、と思った。

(村山早紀『風の港』)

⑥ POP…ここでは本を紹介するために掲示するカード。ポップ広告。

飯テロ：美味しそうな食べ物提示して、見る人の食欲を強く刺激すること。

版元：その本を出版しているところ。

問一——線部1「この思い」とあるが、それはどのような思いか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 亮二の少年漫画は絵もストーリーも良かったうえに、人間や世界への愛に満ちていた点がすばしかったが、その良さを伸ばせず打ち切りになったことが惜しまれるという思い。

イ 打ち切りになった亮二の少年漫画は絵が上手だったし、人間や世界への愛に満ちたストーリーも良く、読んですぐに筆名を覚えてしまうほどすばらしいと感じていたという思い。

ウ 少年漫画の連載は打ち切られたが、絵がうまいだけでなく、人間や世界への愛に満ちた良い作品が描ける亮二には優れた素質があり、漫画をやめるのはもったいないという思い。

エ 打ち切りになったのが本当に残念に思われるほど、亮二の描いた少年漫画は絵にもストーリーにも魅力があったし、人間や世界への愛に満ちていて、自分は好きだったという思い。

問二 —— 線部 2 「俺も、故郷に帰ったら、似顔絵に挑戦してみようかな」とあるが、亮二がこのように言ったのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 漫画家の道をまだ諦めたくないが、かと言って漫画家をやめて似顔絵描きとしての幸せを得た老紳士の人生を否定するのは申し訳ないので話を合わせようと思ったから。

イ すべて投げ出して打ちこまねばならない漫画の世界には戻りたくないと思う中で、似顔絵なら老紳士のように楽しく描いていけるかもしれないと気づかされたから。

ウ 漫画家としての将来には希望が持てなくなっており、老紳士のように人の笑顔を生きがいとして似顔絵を描いて暮らす幸せもあるのかもしれないとふと思ったから。

エ 故郷に帰ったらもう絵を描く仕事はできなくなると思っていたが、漫画家をやめても似顔絵描きとして絵を描き続けるという選択をした老紳士に深く共感したから。

問三 —— 線部 3 「亮二は口ごもった」とあるが、この時の亮二の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 運も才能もない自分のような人間にとって、中途半端に漫画家の夢を追い続けることは危ない賭けでしかなく、老紳士の言葉はきれいごとに過ぎないと思われたが、その思いをはっきり伝えることにはためらいを感じている。

イ 老紳士の言うことも分かるが、好きな漫画を描いても人氣は出そうにないし、運に恵まれず才能も及ばなかった自分が夢を追い続けることは難しいという思いを、老紳士にどう伝えればよいのかうまく言葉を見つけられずにいる。

ウ 漫画家としてはうまくいかなかったが、似顔絵を描いて何とか暮らしを立てていこうと思っていた矢先、老紳士に自分のペースでよいから漫画を描いていくべきだと言われ、今後の生活をどうするか迷って言葉につまっている。

エ 漫画家として大成するという夢を悲痛な思いで諦めて、すべてを捨てて実家に戻る決心をしたのに、老紳士がどこでも自分のペースで漫画を描けばよいと言い放ったことに反感を抱き、どう言い返そうかと考えこんでいる。

問四 —— 線部 4 「茶化すように笑った」とあるが、この時の亮二の様子を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 思いがけず核心にせまってきた老紳士の言葉に正面から真剣な答えを返すことができず、笑ってその場をやりすこそうとしている。

イ 老紳士に冗談を言われたかのように軽く受け流して、夢を諦めたという自分自身の辛い選択からあえて目をそらすうとしている。

ウ 自分の漫画家人生が失敗に終わったことを老紳士にふざけ半分で伝えることで、過去の挫折を明るく笑い飛ばそうとしている。

エ 自分を何とか励まそうとする老紳士の言葉が迷惑で、わざと失礼な態度を取ってこれ以上説得されることを防ごうとしている。

問五 —— 線部 5 「人生に失敗とかバッドエンドとかってあるんですかねえ。――そう勝手に打ち切らなくても」とあるが、この時の老紳士についての説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 漫画で人に夢を与えるのが仕事であるはずの亮二が、いとも簡単に夢を捨てようとしていることにいきどおりを感じ、漫画のたとえに皮肉をこめてその姿勢を厳しく批判している。

イ 実力があるのに運やツキに恵まれず、漫画家をやめようとしている今の亮二が過去の自分に重なり、同じ過ちを犯さぬよう漫画のたとえでおどけながらも真面目に忠告している。

ウ おそらく本心では納得がいていないのに、様々な理由をつけて好きな漫画を描くのをやめてしまおうとする亮二のことを、漫画のたとえで冗談めかしつつも真剣に論じている。

エ 本当は夢を諦める気などないのに、自分の心に素直にならずいじけた態度を取る亮二のことがもどかしく、漫画のたとえで明るく励まし、懸命にその背中を押そうとしている。

問六 —— 線部 6 「ああ、いやすまない、すみませんでした」とあるが、老紳士がこのように言ったのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 亮二が客であることを思い出し、私生活に踏みこんだ意見を言ってしまったことを後ろめたく思ったから。
- イ 亮二が夢を諦めて落ちこんでいるのに、もう一度それを思い出させて傷つけたことを申し訳なく思ったから。
- ウ 亮二の決断は今さら何を言っても変わらないことを悟り、自分の余計なお節介を恥ずかしく思ったから。
- エ 亮二にこれからも漫画を描き続けてほしいと思うあまり、必要以上に言い過ぎたことを心苦しく思ったから。

問七 —— 線部 7 「空は永遠に続き、旅立つひとびとを待っていてくれる。空から舞い降りる翼を、空港は待っていてくれるのだ」とあるが、この表現から読み取れる亮二の心情の変化を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 老紳士の助言を得たことで苦しい状況の乗り越え方を学べたように思い、飛行機が翼のライトを点滅させながら飛ぶ様子を見て、今は漫画家として行きづまったとしか思えなくても、見方を変えれば希望の灯りを見出せるのだと思えるようになった。

イ 老紳士から漫画家を続ける手がかりを与えられたことで自分の将来への自信が芽生え、夜空に向かって飛び立つ飛行機の姿を見て、漫画家としての才能が現時点では世間に認められていなくても、諦めることなく漫画を描き続けたいと思えるようになった。

ウ 老紳士の言葉に励まされたことで自分の夢に対する前向きな思いを抱けるようになり、飛行機が次から次へと離着陸を繰り返す様子を見て、漫画家として一度は挫折したとしても、諦めずに好機を待つて何度でも挑戦すればいいのだと思えるようになった。

エ 老紳士が自分の漫画をほめてくれたことで重苦しかった気持ちが軽くなり、良い風が吹くのを待つて飛び立つていく飛行機の姿を見て、今は自分の作品に人気が出ていなくても、いつかは作品が評価される機会に巡り合えるはずだと思えるようになった。

問八 —— 線部 8 「顔を上げ、歩み寄る」とあるが、この時の亮二の心情を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 少年誌で連載をしなくなって以来書店という場所を目にすることも辛かったが、あえて書店に足を踏み入れることで、これまでの苦手意識を克服しようとしている。

イ かつての少年漫画での挫折を思い出させる書店という存在を目にして反射的に胸が苦しくなったが、気を取り直して、再び漫画というものに向き合おうとしている。

ウ 漫画家をやめると決めてからは書店に入りたくもなかったが、老紳士の言葉を思い出してまだ諦めなくてもよいのかもしれないと思い、希望を持ち直している。

エ 自分の描きたい漫画が売れなかった事実を突きつける書店という存在を見て、また心が傷つきそうになったが、かつての失敗のことは忘れようと決意している。

問九 —— 線部 9 「嬉しいよりも申し訳ない気がした」とあるが、亮二がこのように感じたのはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 料亭の漫画がたくさん読者に応援され人気を得ていたことを知らず、書店の人が自分の作品を大切に売り、支えてくれていたことに感謝をしないどころか、足を運ぼうともしてこなかったから。

イ 少年漫画誌で打ち切りになった過去を引きずり、漫画家の仕事に対して後ろ向きになって、自分の描く作品がこんなにも熱意をこめて売られていたことをずっと気にもとめてこなかったから。

ウ 望み通りの漫画を描けていないからといって、漫画家としての自分を応援してくれている人たちの言葉には見向きもせず、自分の漫画家人生は失敗に終わったと決めつけてしまっていたから。

エ 描いている自分自身が好きかどうかもわからなくなってしまっていた料亭の漫画に添えられている、これまで見る機会がなかった賞賛や応援の言葉の数々が、大げさでもったいなく思われたから。

問十——線部10「深く息をして、うつむいた」とあるが、この時の書店員の様子を説明したものと、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大好きな亮二の漫画が終わってしまうことが残念でならず、そのわけを本人にたずねる前に気持ちを整理している。
- イ 応援していた亮二の漫画が連載終了になるという事実を思い出し、悲しくて泣き出しそうなのを必死に我慢している。
- ウ 連載が終わるのは自分たちの応援が足りなくて本が売れなかったからかもしれない、亮二に申し訳なさを感じている。
- エ 漫画の連載をやめないでほしいという思いをきちんと伝えるために、あこがれの亮二に出会えた興奮を抑えている。

問十一——線部11「大丈夫、この作品が始まる日まで待ったんですから」とあるが、この書店員はどのようなことを亮二に伝えようとしているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 少年誌の連載が終わった後、気長に待っていると料亭の漫画と巡り合えたように、亮二がまたおもしろい漫画をいつか発表してくれることを楽しみにして、多くの読者はのんびり待ち続けているということ。
- イ 漫画の連載が終わった後、漫画家として成長を上げて料亭の漫画の連載を始めてくれたように、亮二が新たに力を付けてよりおもしろい漫画を描いてくれると確信し、それまで諦めずに応援しているということ。
- ウ 少年誌に掲載された漫画が打ち切りになった後も、長い時間待ち望んでいたら料亭の漫画に出会うことができたように、亮二が新しい漫画を描いてくれる日が来ることを信じてずっと待っているということ。

エ 漫画の連載が何度打ち切られても、懸命に努力して新しく連載を始めてくれたように、亮二がまた新しい漫画を発表することを信じて、料亭の漫画の登場人物のように懸命に働きながら待っているということ。

問十二——線部12「なかなかかっこいい仕事だったんじゃないか」とあるが、この言葉から、料亭の漫画に対する亮二の思いはどのように変化してきたと読み取れるか。次に示す言葉の後に続くように、七〇字以上、九〇字以内で説明しなさい。

料亭の漫画は（

）

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

イソップの寓話に「キツネとブドウ」というお話がある。一匹のキツネがたわわに実るブドウの房を木の枝に見つけ、なんとかたどってやろうとジャンプする。何回か挑戦してみるが、とても届かない。あきらめたキツネは、「あのブドウは酸っぱいに違いないや」と言い捨てて、毅然とした態度で去って行くという物語である。

このキツネは、自分のジャンプ力が弱いために「甘いと思われるブドウ」を取ることができないという現実を受け入れずに、「酸っぱいに違いない」と無理やり思いこもうとしている。物語は、ウソの想像によって悔しさを紛らしたり、他者に弱みを見せない行動をとったりする滑稽さを指摘している。

もちろん、実際のキツネはこのような行動をとらない。想像力が低いので、「酸っぱいに違いない」と無理やり思いこむことはできないし、他者が自分をどう見ているかを考える社会性もそれほど発達していない。だから、お話を讀んだ人間が「キツネなんだからしょうがないよね!」とひとしきり笑った後で、「実はこのキツネは人間を象徴しているんだよ」と気づかされると、その嘲笑が自らへと返ってきてしまい、ギクツとさせられる。その意味で「キツネとブドウ」は、ある種の「恐ろしい寓話」とも言えるのだ。

人間には、自分の弱みを隠し、自己肯定感を高めようとする本性がある。他人に弱みを見せないようにするだけでなく、自ら弱みを自覚しないように意識から遠ざける傾向までがある。そうして築かれた自己肯定感によって自信が生まれ、奮起できるのであるから、この傾向はあなたが軽んじられない。

しかし、その結果、人間は自己肯定につながる情報に対して敏感になりやすい。その事実には注意が必要だ。たとえフェイクニュースであっても、せっせと情報収集して自己肯定に利用してしまう。ときには、情報を拡大解釈して、無理やり自己肯定につなげることさえある。

こうした自己肯定感を無理やり高める行為を「自己欺瞞」という。いわゆる「自分だまし」であるが、人間が生活しているうえで、欠くことができない心理過程になっている。これが本章のテーマである。

「キツネとブドウ」のお話にちなんで、自分が得ることができないものを過小評価する心理機構を、心理学では「酸っぱい

「ブドウ」と呼ぶ。想像力を駆使した「理由づけ」によって心の安定を維持する仕組みで、心理的な防衛機制のうちの「合理化」のひとつとされている。

反対に、自分ができることができたものを過大評価する心理機構もあり、「酸っぱいブドウ」に対して、ときに「甘いレモン」とも呼ばれる。酸っぱいはずのレモンでさえも甘く感じるという強烈な表現で、私たちの「合理化」の強さや根深さをテキカクに指摘している。

「甘いレモン」の現象がよく見られるのは、高額な買い物をしたときである。買ったものは、いいものでなければならぬ。金額に見合わない悪いものをつかまされたとなれば、悔しさが膨らんでしまう。

その心理がよく現れるのが、広告の閲覧行動である。たとえば、高価な車を買った人は、買わなかった車よりも、買った車の広告をよく見ることが知られている。広告には、いかに「いい車」であるかが重ねて記載されているので、自分が買った車の広告を見れば、「いい車を買ってよかった」と自己肯定が進む。その一方、他の車の広告を見てしまえば、買った車にない性能の良さや、値段の安さがあらわになってしまいかねない。なるべく見ないようにするのが、平穏な心を保つのによいのだ。

同様の「甘いレモン」現象が、具体的な問題を起こすことも多い。たとえば、株式トウシで値上がりを見込んで買った株が、意に反して値下がりをした場合だ。失敗を認めたくないトウシの初心者には、値下がりしてもなお「いつかは上がる、いい株」に違いない」と思いこんで、持ち続けてしまう。

また就職活動にたいへんな努力をして入った会社は「いい会社」に違いない」と思いこむ傾向もある。やめてしまえば「たいへんな努力」が水の泡になってしまい心の安定を損なうので、自己欺瞞の意義もある。しかし、会社が社員の離職を避けるために就活のハードルを上げているのであれば、「つらい就活もいい勉強になった」と合理化を働かせ、思い切った転職することも選択肢のひとつである。

このように、自己欺瞞は心の安定を図る大きな利点がある一方、現実を見失う欠点もある。(中略)

右に述べてきたように、人間には自己肯定感を高めようとする気持ちがあり、それが自己欺瞞の原因となっている。ここではその気持ちの由来を探っていく。

恐怖や愛情が、動物の時代に由来する感情であるのに対して、自己肯定感やそれを維持したいと思う気持ちは、主に狩猟採集時代に形成されたと考えられる。(中略) 狩猟採集時代は五〇人から一〇〇人くらいの固定的な協力集団で一生を過ごしていた。ある集団に生まれれば原則一生その集団で生きたのであるから、当然、集団の一員として認められることが必要不可欠だったのである。

狩猟採集時代の集団では、密な協力が特徴となっていた。小グループに分かれて狩猟に出かけ、とれた獲物は皆で分け食べる。木の実が熟す時機になれば大勢で採集に出かけ、集めた木の実もまた分配するという生活だったようだ。仕事を効率的に進めるために、集団のメンバーには役割分担があったにちがいない。たとえば、腕力が強い者は狩猟のときのやり投げ担当、目が利く者は捕食動物が襲ってこないかを監視する採集時の見張り役、といった具合である。

こうした集団では、そこに生まれ育つ子どもが「何が得意で、何の仕事をうまくこなしてくれるか」をいち早く見きわめて、その仕事を担当させるのがよい。逆に、子どもの側からすると、自分が得意であることを認識して、担当できる仕事を申し出るのがよい。うまく仕事ができたら大人たちから認められれば、早々と大人の仲間入りなのだ。

この協力集団の環境が、私たちに特有の感情や欲求を進化させたのである。「自分には集団に欠くことができない仕事を担当できる力がある」と思う自己肯定感、そうした仕事を担当できるとアピールして、周りの人々からの承認を求めようとする欲求である。任された仕事をうまくこなすことができれば、最後に達成感と満足感が得られるわけだ。協力集団に属することが生き残るうえで不可欠だった時代ならではの事情が、私たちの行動を方向づけたのである。

この一連の過程に「フェイク」が侵入してくる。「仕事を担当できる力はいまひとつだな」と自分でうすうす思っているも、「担当できる」と意欲的にアピールしてしまうのだ。すると、周りの人々も「そんなに言うのなら」と、「フェイク」にだまされたつもりになって任せてみる。その結果、いくぶん失敗を重ねるかもしれないがカッコウの練習になり、一人前になるまでに仕事の上達するのである。

こうして、「フェイク」が本当になっていく。これは「予言の自己成就」と呼ばれ、私たちがときどき達成の難しい目標に挑み続けるときに使うテクニックである。

たとえば、難しい課題に挑戦するとき、「一カ月で跳び箱一〇段跳んで見せる！」などと、周囲の皆に公言することがそれにあたる。いったんアピールした事柄は、達成する社会的な責任を伴う。達成できなければ、「口先だけの奴だから、信用するのはやめておこう」と思われてしまう。その責任感から、なんとしても達成しなければという意欲が湧き、つらい練習も続けられるのだ。

よく考えると、この課題挑戦を始めるには、「自分には、跳び箱一〇段跳べる素質がある」と信じる必要がある。素質がある根拠が何もない状態でも、それを漠然と信じなければ始まらないのである。これが自己欺瞞の必要な理由である。

協力集団にはいろいろな仕事があり、それぞれの仕事をこなす人を誰かに割り当てなければならぬ。普通に考えれば、やったこともない仕事には自信が持てず、やりたくないと思うのが当然である。しかしそれでは協力集団は成り立たない。

私たちは、集団の長老の「君なら大丈夫。絶対できるから、自分を信じるんだ」という言葉に共感して、自信を持てるようになり、協力集団形成に成功してきた。さらに私たちは、自分自身を鼓舞して、未知の仕事でも率先して挑戦できるほど、自己肯定感を高く維持できるようにも進化した。その背景では、自己欺瞞が一役買っているわけだ。本心では「できそうにない」と思っているのは意気込みに欠けてしまし、大人たちから本心を見透かされてしまう。心から「できそうだ」と思う自己欺瞞が必要だったのである。

(中略)

現代社会の生活は狩猟採集時代とは大きく様変わりしている。それでも私たちが自己欺瞞のシユウカンを維持しているのは、どのような理由からだろうか。

前節に述べたように、狩猟採集時代に自己欺瞞が必要であった理由は、協力集団の一員として受け入れられる承認欲求からであった。考えてみると、かりに協力集団の一員として受け入れられれば、自己欺瞞の必要性はそれほど高くない。抜きん出た成果をあげるとアピールしなくとも、自分の実力は周りの人に知られているし、そもそも協力集団内ではある程度の食べ物も分配されるので、抜きん出た成果は必要ないのである。また、年をとれば、若者に仕事を譲っていくものであるから、見栄を張る必要もない。

こうしてみると、文明社会では狩猟採集時代のような密な協力集団が希薄になっていることに思いイタる。基本的な生活を支える協力集団が周囲になれば、狩猟採集時代のような形では私たちの承認欲求は満たされない。よく言う「居場所がない」という状況はその承認欲求不全のひとつの現れだろう。そこで現代では、お金を稼ぐことで基本的な生活を支え、何かの人間のなつなかりを築くことで別途承認欲求を満たしているようだ。

ところが、お金を稼ぐことが個人的な営みになっている文明社会では、周囲の人々との競争関係が生じやすい。すると、「自己肯定感を高めてアピールし、周囲の承認を得る」という一連の活動が、旧来は協力集団の一員になるための成人への過程であったものが、現代では、一生を通じての仕事上の活動原理となりがちなのだ。

(石川幹人『だからフェイクにだまされる——進化心理学から読み解く』)

⑧ 防衛機制：自分を守ろうとする心の働き。

鼓舞：励まし勢いづけること。

問一 〰〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1「ある種の、恐ろしい寓話」とも言えるのだ」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 寓話ではキツネが自分のことを正当化しているが、改めて考えると想像力や社会性に乏しいキツネがそのような思考などできないことに気づかされるから。

イ 浅はかなことを考える動物はキツネだけだと思っているが、人間も自己肯定のために自分の弱点を隠そうと考えがちであることを改めて認識させられるから。

ウ ウソの想像で現実逃避しようとするキツネの滑稽なふるまいが、そのまま自分たち人間に当てはまるという事実を不意に突きつけられることになるから。

エ 自分の過ちを認められないキツネの恥ずべき行動が、実は人間の姿を風刺したものであるという物語の結末に、人間の愚かさ（おろかさ）がはつきりと示されているから。

問三 ——線部 2「情報を拡大解釈して、無理やり自己肯定につなげる」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自己肯定の材料になりそうな情報ならなんでも、積極的に取り込んで都合の良い意味にとらえようとする。

イ 自己肯定の材料になりそうな情報だと思えば、たとえウソだとわかっていても信じこんでいるふりをする。

ウ 自己肯定につながりそうな情報は、自分からあえて周囲に拡散することで自己肯定感を高めるのに利用すること。

エ 自己肯定につながらない情報は排除し、自己肯定感を高める情報だけを過度に重視して自信を保とうとすること。

問四 ——線部 3「想像力を駆使した、理由づけ」によって心の安定を維持する」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 手に入らなかったものが重要ではなかったと思える理由を自分に都合よく作り出すことで、他人に対して失敗ではなかったと合理的に主張できるようにしているということ。

イ 手に入らなかったものが欲しがるほどのものではなかったと思える理由を頭の中で無理に作り上げることで、自分が傷ついてしまうことを避けているということ。

ウ 手に入らなかったものは価値がなかったと思える理由を思いつくままに並べ立てて強がることによって、本心を表に出さず他人に弱みを見せないようにしているということ。

エ 手に入らなかったものは大したものではなかったと思える理由を想像して作り上げることで、これまでに築かれた自己肯定感が損なわれるのを意図的に防いでいるということ。

問五 ——線部 4「甘いレモン」現象が、具体的な問題を起こすことも多い」とあるが、「甘いレモン」現象が「問題を起こす」とはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自己肯定感を高く維持しようとして自分の能力を過大評価することが、いつまでも失敗を認められず、取り返しのつかない結果を招いてしまうこと。

イ 自分が得たものを良いと思いきんで都合の悪い情報を見ないようにする傾向が、他者にいいように利用されてしまい、損失をこうむることになること。

ウ 不都合な現実と向き合わず、現状を維持するだけで何もしないことを続けていると、無自覚のうちに主体的に行動することができなくなるといふこと。

エ 手に入れたものの価値を高く見積もることで自己を正当化しようとする心理が現実から目を背けさせ、自分に不利益となるような行動をとらせること。

問六 —— 線部5「この一連の過程に『フェイク』が侵入してくる」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 集団の中で承認されて生き残るために、若いうちから自分の得意なことを見極め、それを人より早くこなせるとアピールしていく中で、他者を出し抜こうというがしこい考えが芽生える可能性があるということ。

イ 集団への仲間入りを果たしたいと思って仕事を積極的に買って出るといふ行動の中に、必要とされる能力があるわけでもないのに、背伸びをして実力以上の仕事ができるふりをすることが生じてくるということ。

ウ 集団の中で一目置かれたいという自分の欲求を満たすために、周囲の人々をあざむいて勝手な仕事をするうちに、これまでにはない新たな方法で仕事を進められるようになるという効果を生むかもしれないということ。

エ 集団に生まれ育った子どもを早く役に立つ存在にしようとして、大人たちがその子の能力に関係なく担当の仕事割り振る行為の中に、子どもができないことまでできると過信してしまう危険性がひそんでいるということ。

問七 —— 線部6「予言の自己成就」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 達成の見込みがそれほどなくても、周囲に対してあたかも自信があるかのようにふるまうことで、訓練を重ねざるをえない状況を作り出され、十分な実力を身につける。

イ できるとウソをついてまで達成の難しい課題に取り組んで失敗すると、その責任を取ることになるが、そのぶん周囲の信用を取り戻そうと腕をみがくため、仕事が上達する。

ウ 周囲に求められる以上に困難な目標を立て、達成すると公言することにより、その約束を果たすために努力する過程で、本来必要とされていた能力が自然と習得される。

エ 自分の力量を実際よりも高く言いふらしていると、周囲から大きな期待を背負うことになるが、そのことが責任感や意欲をもたらし、技量を向上させることにつながる。

問八 —— 線部7「心から『できそうだ』と思う自己欺瞞が必要だったのである」とあるが、狩猟採集時代において「自己欺瞞が必要」とされたのは何のためか。五〇字以上、七〇字以内で説明しなさい。ただし、次の言葉を必ず用いて答えること。

協力集団

問九 —— 線部8「『居場所がない』という状況」とあるが、現代社会においてそのような「状況」が生じるのはなぜか。

次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集時代とは違い人間的なつながりが希薄になったために、集団の中で常に目立った成果をあげていなければ仕事を得られず、承認欲求を満たすことも難しくなったから。

イ 周囲の人間との競争関係に勝ってお金を稼ぐという個人的な営みが何よりも重要となったために、かつて人々の承認欲求を満たしていた協力集団が、今は失われてしまったから。

ウ 集団で働かなくなったことで、他者から仕事の成果を認めてもらえる機会が減ってしまい、自分で自分を肯定する以外に、承認欲求を満たし続けるための手段がなくなったから。

エ 生活を営むうえで集団で密な協力をする必要性が薄れたために、仕事を成しとげることで集団の一員として認められるという形では、承認欲求を満たす機会が少なくなったから。

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合計

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問 十一					料亭の漫画は
90	70				

二〇二三年度 一般入試② 国語解答用紙(2)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

小計

二

問 一	
d	a
e	b
	c

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六

問 七

問 八			
70	50		

問 九

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

	解信用紙2
--	-------

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一
エ

問二
ウ

問三
イ

問四
ア

問五
ウ

問六
エ

問七
ウ

問八
イ

問九
イ

問十
ア

問十一
ウ

料亭の漫画は				
る	こ	人	、	自
よ	と	た	夢	分
う	を	ち	を	が
に	知	を	持	描
な	り	描	ち	き
っ	、	く	、	た
た	自	こ	誰	い
。	分	と	か	漫
	の	で	を	画
.90	70	読	愛	で
	い	者	し	は
	た	に	、	な
	漫	勇	懸	い
	画	気	命	と
	に	を	に	思
	詩	与	仕	っ
	り	え	事	て
	を	て	を	い
	持	い	す	た
	て	た	る	が

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問 一	
d	a
習慣	的確(適確)
e	b
至(到)	投資
	c
	格好(恰好)

問二
ウ

問三
ア

問四
イ

問五
エ

問六
イ

問七
ア

問 八			
る	じ	求	協
よ	込	を	力
う	ん	満	集
に	で	た	団
す	、	す	の
る	未	た	一
た	知	め	員
め	の	に	と
。	仕	、	し
70	50 事	自	て
	で	分	認
	も	に	め
	率	は	ら
	先	素	れ
	し	質	た
	て	が	い
	挑	あ	と
	戦	る	い
	で	と	う
	き	信	欲

問九
エ